

記代一丸徳俊

備は心配を致して(正)秋篠何を致して居るか……若様の御容子が今朝程は宜くないのか……ドリヤお伺ひ申して来やうと頼て俊徳丸の部屋へ参ると妻の秋篠が泣いて居ります(正)コノ秋篠若様は何様か致したか今朝程は御様子が悪いか(秋)悪い處では御座りませんか是を御覽遊ばせと二通の書置きを出しました(正)何に書置きエ——エと驚愕致し(正)何に錦織夫婦へ高安御父上様へ——是の容易ならぬ事じゃ——正儀は面戸掛け眼鏡を付けて自分宛てた書置を開封致して見ると

其方の忠節秋篠の介抱實に両親にも勝り手厚く致し呉れ得共如何ある宿世の因縁にや斯る業病に取つかれ何時全快の見込も無之實に吾身ながら淺間敷思ひ且つ斯様の有様にては迎も家相續致すこと相成難く加之繼母萩葉殿の一子成弱殿今年十五歳に相成以て繼母の深く成弱殿を愛しし間吾が高安に居らずとて

も差支に相成不才又萩葉殿も吾が家出致し殊に業病あれば成弱殿を以て家督と定め給へば御心も落付可申只遺憾なは父上へ對し御恩も送らず此儘相果てし事残念に以得共宿世の縁と思召不孝の罪敷宜其方より御父上に御詫び被下度亦秋篠へも永々養育に相成し事呉れども御傳へ被下度以上

錦織正儀殿

俊徳丸

と讀み了り悲嘆に咽びました是より如何相成ますか又々次席に於て申上り

第二十三席

高安長者通俊殿は錦織正儀が忙立敷く注進によつて俊徳丸の書置を開封せられ給ふに

記代一丸徳俊

一御父上様へ書遣し申し私事永々御養育に預り山より高く
 海より深くいへ共如何なる次第にや此度の業病連も全快の義覺
 束なく存じいに付き生て父上に御心勞相懸けいより死して往生
 を遂げし事可然と自ら覺期仕い只残り惜しくいは深き御恩を受
 け其御恩を報ぜず死する身の悲く存い就ては繼母殿の一子成弱
 殿を御家督と爲し私に替へ御不愍と思召御養育被成下し様只管
 奉願上い未だ申上度義は數々有之い得共病の爲めに筆とること
 も自由に相成不申間御推察爲遊度不束の私地下にて御詫び申
 上い恐惶謹言

月 日

俊 徳 丸

高安御父上様殿下

と頼了るが否や通俊殿恩愛の泪ハラ〜と御落涙を催ふされ(通)
 ア、早まりし俊徳何迎懸る無分別な事をせしぞ……兼て合法仙人

の傳へに必ず全治するぞやた事もあるに何迎て懸る情けあき心に
 成り居つたと流石親子の情でおさゝる升愛念に引されて高安殿は尙
 ほ〜御不愍が増さりました是より錦織の夥多の下士四五十人を
 手別致して東西に奔走せましたが更に俊徳丸の行衛の相分りませ
 ん是に於て御父高安殿冊傳錦織正儀も力落致されて暫時止みまし
 た諸俊徳丸は弱法師と相成迎り〜て浪江へ出でました(此間余程
 難苦の件がござ座りますすが省略致して管々數事柄は申上ません(童)
 源ちゃん御覽ヨ一寸御覽ヨ彼處へ往弱法師を御覽……妙ダヨ(源)
 金ちゃん那の乞食は腫物だらけだヨ(金)目も口も鼻も滅ッ茶に成
 ヲて分りやしない(竹)チイ〜皆んなお出ヨ弱法師に草鞋を投付
 て遣ろ(大勢)ヤイ、ヤイ、弱法師……狂ひ舞の弱法師……ヤイ躍つ
 て見ろヤイ……アレ、倒れ、ヤアカツタ形状を見ろヤイ、ど沸騰跡を追
 かけます、然れば往來の人は皆な立ち止りまして、或は垢汚乞食と賤



め、或は不愍の者と云つて助け、一錢、二錢の施行を致す者も御座い升
 が迎も此れが河内の長者高安殿の若君とは思へません惣身より濃
 汗は流れまして汚苦しいのは勿論、臭氣紛々致して實に何とも仮
 令ん様がござるません、雙眼は濃血の爲めに塞がり、盲目同様であ
 りますが、日中は只明るくホト見へるだけの物で形は丸で相分り
 ません(人)ナントマア、因果な事じやあまへんカ……何んノ再來て
 那の様ナ子が出来ましたかナ(甲)左様ナア……大方親御はんが山
 入でも、しやはつマ、サカイ那ノ様ナ癩風の兒が出来マアおませう
 と街々風評を致して居り升、其中以前の童子大勢寄つて石瓦をド
 ン投げ付けますから、憐む可し俊徳丸の身体へ中り或は腦を打ち
 或の手足を傷けると云ふ實に目も當てられぬ有様で(俊)ア、痛い
 ア、痛イ苦しい〜と……と……と悲鳴を揚ぐ……何方でも弱法
 師を助けて下さい、助けて下さいと手を合掌して伏し拜み(俊)是れ童

子達ヨ聞いて給へ……無慈悲な事を爲し給ふぞ予も元よりの弱法
 師ではなけれど如何なる宿世の因縁か重き風癩の病により吾が
 身で吾が身が自由にならずと云ひさしては泣き又た云ひさしては
 悲しみの袖を絞り見へぬ眼を押し拭ひ(俊)夫故故郷を跡にして杖
 を力に弱法師、吾が罪咎を障滅さする爲め諸國を廻ぐる心にて家は
 出づれど父上の嘸や歎ひて居すらん……コレ童子達ヨ弱法師が舞
 舞て見する程に赦して給へ、赦してと杖にすがりし有様は實に不愍
 てござる升童子の情け用捨もなく(童)ヤイ弱法師何チ云ふノダ赦
 して遣るから舞つて見る舞つて見ろと群がつてツイ〜と囁した
 てます、スルト、敝衣を身に纏ひました、巧食法師、カ〜と俊徳丸の
 傍へ遣つて参りまして、勞はりあがら夥多の童子に(法)コレ〜童
 子ヨ此片輪に搦まうと手前達も仲間連れて往くぞ早く逃げる逃
 げないと予が連れて往くぞ追ひかけますから童子達は連れて往

記代一丸徳俊

かかれては大變々と思ひまして四方八方へ散亂て仕舞ました(法)コ
 ノ風癩其方は何處の者ダ(俊)ハイ(法)兎も角も予と一處に往(俊)
 ハイ……何處へても参ります影様で助かりましたと厚く法師へ
 禮を述べます(法)手前一跡何處の者ダ(俊)ハイ河内(法)河内は
 何處ダ(俊)ハイ河内どの覺へて居りますか父母の名は存しません
 (法)知らんければ知らんで宜いサア予と一處に來いと俊徳丸を
 連れまして天王寺の南門の傍へ参りましたスルト此處に非人小
 屋と申す巧乞の住んで居る俗に鎌鉾小屋とか申しますものがござ
 り升彼の法師の俊徳に指揮を致して(法)コレ此家の予が住居ダが
 予の部下にあれば日々市中を歩き幾許かの錢を得て來んければな
 らんゾ……若し錢を得ずして歸つて來れば法度を反くによつて辛
 目に遭すゾ(俊)ハイ……と俊徳丸は悲かわしくも此法師の部下へ
 加入致し日毎日市中を廻はり狂ひ舞を致して何程かの錢を得て

記代一丸徳俊

参ります斯く致すこと漸々三ヶ月余りも相立ちました但其艱難
 辛苦と云ふものは中々容易な事では御坐いません丁度二月時正の
 入りの事でおざり升て誠に長閑で大分天王寺へ群集致します此
 は最う人々も天王寺の弱法師と申て存じて居ります然れば俊徳丸
 の弱法師は幽かに目を開き狂ひ舞を致して往來の参詣人に請力を
 得て居りますが丸で描きました河童が陸で躍つて居るやうで弱法
 師は人間とは思へません併し舞の手振りには形状の酬体とは大に相
 違致して實に志ある者は感心致してイんで居ります是は其筈で合
 法仙人が保護を致し雅勝が影身に添ふて指南致すのみならず天賦
 の才があつて一を聞ひて十を知ると云ふ俊徳丸でおざり升然れば
 俊徳丸の胸中では中々様な淺間敷所存は御坐いませんが癩病に
 罹り高安の嫡子と相成る事が出來ない殊に繼母の子成弱があつて
 は逆も自分が高安家を相續しては繼母へ氣の毒だと存じます處か

記代一丸德俊

ら余義なく弱法師と相成つたのでおさる升が、今と成つて見れば早く全治して仮令高安の家を相續せずとも朝廷へ参内して聞法樂の舞を天覽に供し度いと云ふ心で居りますが、業病で仕方が御座いません只心中で死したと諦めて居りますが眞に懸然のおど然るにお話替つて高安家では俊徳丸が家出の後何様致しても知れませんが、通俊殿も正儀も是は何方へか落給ひて全く業病を患ふる爲めに身を棄てられた事だと存じ家出の日を命日と定め俊徳丸の俗名を戒名へ記し之を佛壇へ飾り香花を手向け追善共養を致して居ります中丁度時正に當りますので通俊殿の一子俊徳丸追福の爲め亦た二世安樂を願ふ寸志として錦織を始め二十余人の従者を連れ三日の間天王寺に於て夥多の貧民或は乞丐に米銭を施行致します然れば其施行の場へ高安殿を始め天王寺の住職、錦織正儀、其他高安家の家臣一同居並び衆卒に下知を傳へて充

記代一丸德俊

満致して居る、非人乞丐等一々名を糺し米銭を施行致します是は大増ちもので二日の中に何千人と申施行でおさる升が實に善根に相成ます然るに俊徳丸の弱法師は師の坊の命によつて施行の場へ畏るゝ参り角隅の方へ縮々として可成目立たぬやうに致して居ります之は其等で自身の慈父高安殿が自分の身の上を案じて施行を致すのにノメ〜と其處へ出られる分のもので御座いません左様斯様致す中、退ひ〜日も西山に傾むきますので施行を受けました者は有難がつてバラ〜散つて行きます俊徳丸は何様致しても施行を受けますのが厭ではあり目は幽かに明きますけれども判然と分りません(俊)ア、那ノ御登は御父上ダ……アノ登は正儀だと存じますから何分にも前へ進みかね、一層施行を受けずに歸へろうとは思ひましたが此儘歸へれば師の坊に咎められ打擲を受けねばならないと思ひ(俊)ア、常体なら斯んな思ひをせずとも慈父上

にも遇へ正儀にも面會が出来ると念ひますと自ら猿勢く相成不
 思ワツと嘆き出しました其時通俊殿は不斗弱法師を御覽に成り如
 何にも俊徳丸のやうに思召しますが風体が丸で化物の様であり升
 から何様も判断とは相分りません併し親子の情と云ふものは妙な
 もので如何にも汚臭弱法師でいあります御心中で不愍な者だと
 思召すと愴然として憐れを催ふされ正儀を召して(通)コソ正儀
 アノ弱法師を視ヨ……如何にも俊徳の様に思ふが何様じや正儀は
 熟々之を視頸を傾むけ(正)御意の通り拙者も左様存じますか
 ……如何に癩病にて御腦せらましても正可那ノ様なお妾には相成ま
 すまい(通)予も左様思ふがマア其方問ふて見イ(正)御意では御坐
 いますか只今御前では全くの俊徳丸様なら決して眞をお明し遊ば
 す氣遣いの御坐いますまい是は寺僧をして尋ねさせま一マ方が宜
 しかろうと存じます(通)如何にも夫が宜いと是から寺僧に依頼寺

僧に申合せますと(僧)委細畏るまりましたとお受けを致し(僧)
 コソ其處に居る弱法師へ施行致すが姓名を名乗らねば往んが
 何んと申さる(弱)ハイ法師は幼きより盲目にて父母に捨られ巧
 乞の群にて成長ました故何處にて生れしか分りません何卒お施行
 をお恵み下さいホロリ明ぬ睫を押へ泣く有様を高安殿の御覽
 せられ(通)正儀……(正)ハ……(通)彼れ如何にも不愍に存ずる
 が予は何様も俊徳のやうに思はれて何分心が濟ん……其方自身に
 尋ねて見イ(正)ハ……正儀も亦左様ではいかと思ひますので
 草履を穿きまして弱法師の傍へ進みますと其臭いことは實に鼻を
 斷離れるやうで(正)コソ法師ヨ只今上より下さる施行供養の簿冊
 へ記さねばならぬ生國と父母の名は何んどやされる……其聲を聞
 き俊徳丸ハハア正儀の聲だナと思ひ心の裡で驚愕致し懐慕くも
 御座いますから(俊)ヲ、正儀かどや度いの胸に満ちて居ります

が如何にせん賤しき弱法師の身を恥ぢましてワザト押隠し(弱)言
 目の癩人生國も父母も知りません、……通俊殿の堪り兼まして(通)
 コレ、俊徳隠すには及ばん通俊ダツ明白にやせ、決して困しうない
 (弱)ハ、アト地上に打伏しました其筈でおさる升恩愛の父が淺か
 らず斯くも賤しき乞食に誠を明せと才心は實に云ふに言れぬと
 で俊徳丸のオ、父上様かど飛立つ程に思ひ己に口までは出て居り
 ますが恥を存じて居るから、チツト堪へて見へぬ睦たをしぼた、き
 (弱)イエ生國も父母も知らぬ乞食でござる升何卒お慈悲にお施行
 をお願いや上升(通)左様か然らば施行を遣うらと傍にありまし
 た梅花を取り給ひて(通)サア施行致す法師之を受けヨ……(俊)ハ
 イお恵みの程難有たら存じます……難波津に咲や此花冬籠り御芳
 志に預り弱法師が狂ひ舞を御覽い得と沮を拂ひ(弱)恩愛の情淺か
 らず、實に今日の御施行ある大慈大悲の御供養と物狂わしき形

狀にて溢る、涙押拭ひ杖を力に難有たや、と名乗りもなさず懐
 々と伏屋をさして歸へりました是から俊徳丸老法師の爲めに打殺
 されると云ふ件りに相成ます

第二十四席

俊徳丸の弱法師は慈父より受けし梅花の一枝深き恵みと喜びまし
 て伏屋をさして歸へりました(弱)師の坊只今戻りました(師)弱法
 師今迄何を致して居った(弱)ハイ施行の人が多く居り遂ひ遅くお
 りました何卒お許し下さい(師)ナニ施行の人が多し爲め遅くなッ
 マと(弱)ハイ(師)米を貰ふて来たか(弱)ハイ(師)イヤ米なり錢な
 り貰ふて来たか(弱)ハイ米に變へて此花を貰うて参りました(師)
 何に生命を養ふ米も貰はで梅の花が何になるゾ……汝は汝は不埒
 な奴ダ何とて米を貰はず此んち物を貰ふて来たサア汝の如き世に

記代一丸徳俊

捨られし痴人、迎も人間の交りはなるまい吾が手に掛けて殺して遣
 る。サア其梅花を此れへ出せ出さぬか、サア出せと眼を瞞し丁々々ど
 力に任かせて打据へました(弱)ヒーヒーと云ふ悲鳴を揚々意氣も
 幽かに相成ますのを老法師は實檢致し阿々々と打笑ひ(師)コレ俊徳
 丸……ぞ云へれますので眠るが如く弱つて居りました弱法師實名
 を言われッ、ト驚ろき(弱)ハ……イハ……イ(師)サア臨終に言ふ
 事あり……能く聞け吾は繼母の萩葉より依頼れ汝を殺して呉れ
 と依頼れたから汝を殺して褒美の金を貰う所存ダサア此毒を喰へ
 サア、此を喰はぬかと責め立られ(弱)ハイハイ息も絶ゆ氣に(弱)ア
 、淺間敷い吾が頼末先刻父上様にお目に懸り、夫とはなしに賜はり
 し此梅花難波津に咲や此花冬籠り王仁が作りし三十一文字を吾が
 心にうつし今冬籠りとすせしも甲斐なき事か情ななや、ナウ父上
 様此世の名残今一度遇ふおどの叶はずや……繼母の命せにて死す

記代一丸徳俊

る此身は是非なけれど御父上に生々々々の御恩も送らず臨終に至
 るとはアラ情けなき形状とよよと斗りに弱法師泣涕あがる胸の
 裡、想像で最ど憐れでおさる升其時巧頭の法師聲荒く(法)サア早く
 めろくせす此を飲めと彼毒藥を納れました器を俊徳丸に指付け
 ます、俊徳丸は(俊)是ぞ吾が罪障生滅するの時なりと彌陀の唱名を
 數遍唱へました只一飲みに飲み干しました是を見ると法師は阿々ど
 打笑ひ(法)サ、毒を喰ひしか、ヲ、毒を服せしか、是から吾は汝の死
 を檢査萩葉の方へ知らせた褒美の金に有付の甘し甘去と頬を叩
 き暫時俊徳丸の容態を窺つて居るとウーンと俯仰に吐血致して空
 を掴んで遂に茲に往生を致しました實に無慘と云ふも余りある次
 第で借此巧頭の老法師善か悪か將た無慘あるか未だ是を詳にはず
 上られませんが暫時後席に付て御覽を願ひ升是より高安殿主従は
 俊徳丸の身の上を案じまして施行の場を閉場致して、通俊殿は正儀

記代一丸徳俊

を従へ清宵なる江月を泳め丐乞の伏屋へ尋ねられました(通)正儀
 覗いて見んか(正)ハ、ア―お受を致し正儀は小屋の垂れを上げ
 裡の様子を視ますと竹の柱に菰を敷き最と哀れなる風景でありま
 すので(正)ア、お情けない御館に在る時わ凌羅錦織に御身を纏わ
 せらるゝに此御姿は何事だと思ひますと氣丈の正儀何にどなく泪
 を流し(正)若様……若様と月光に透し聲を掛けますが一向答へが
 ありません(正)ハア變んな勘梅だと存じて小屋の裡に這入り(正)
 若様……若様と寛り起るしめますと如何なしたりけん疾死去た様子
 に仰天(正)御前若様は御遊去の御様子(通)ナニ死去致したか……
 ア、不惑な事を致した……ドレ菰を上げて予に遇はして呉れ(正)
 ハ、……と垂れ菰を揚げますと宵月照添ふて伏屋の裡を照します
 (通)ホ、汚臭事じやと仰せられながら俊徳丸を御覽遊ばすと血汐
 に染みて絶命致して居ることとござぬ升から愛別離苦の悲歎大方

記代一丸徳俊

ではありません正儀も供に悼しく思ひ(正)御前此若様の御姿具に
 お痛歎う存します……是と云ふのも皆な萩葉の方の悪意より生ぜ
 し事……先ツ年正儀へ若様が御物語を遊ばされし時り晋の豫讓の
 例を引きお話しを爲さりましたも今日是を察しますれば吾の豫讓
 の志と俱に爲さるゝと云ふお詔を正儀只今思はれます……實に御
 悼しき事とござると目を瞬開き忍び泣きに老臣正儀は泣き出しま
 した(通)ア、左様か……吾が一子ながら俊徳の志し世に亦とは有
 るまい……恥を忍び重き病ひを胃し予に心勞致させまいと存じ且
 つは繼母萩葉の悪意を知れども繼母たる二字に對し孝道を守り一
 身家を退きしは是れ實に孝子の本分ともすべく併し今日此形状に
 て相果しは是れ遺憾の一ツとは云へ美名は末世に輝くべし……何
 にしても屍は從卒に身せ邸へ引取り葬送を營むによつて其仕度を
 致せと仰せられました浩處へ來る者がござぬ升是れ此れ舊早良

記代一丸徳俊

親王の臣下當時浪人致して居る大伴玄藩身の生計に困る處から強盗に相成處々へ押入りまして金銭を掠め之を以て榮耀の料と致して居りました。が樂音寺に於て正儀の爲めに恥辱を取り其上此れが爲めに浪人と相爲りましたが元自己が肝惡の心を以て媚を賣らんと爲し其事が手違に相成ました。が元々身から出た錆だが惡い奴は仕方のないもので却つて正儀を恨み正儀の爲に自己が斯様な事に相成つたと一筋に思ひます處から正儀を討つて自己が意恨を晴そうと致し始終正儀の他宿を窺つて居りました。が正儀は中々物に油断を致しません人です。から何様も其透きがありません。スルト此天王寺は世に名高き寺で多くの人が此處を徘徊致すのに不斗も施行の事を聞き付け覗らつて此處へ参るり物をも言はず正儀の後を目懸けて切付けました。正儀の中々劍道の達人でありますから太刀風にハット驚き、フット身を横に返し小手を延ばして襟上をムンツ

記代一丸徳俊

ト掴み(正)エノ何奴なれば畢竟にも予を害さんと爲すか……不埒ナ奴ダ……何者ダ……(玄)玄蕃ダ……玄蕃ダ……死せ……放せ……(正)何に玄蕃とナ……何んの恨みがあつて予を害さんとする(玄)何ぞや樂音寺境内で汝の爲めに恥辱を取り夫れから結局浪人シタ……夫が意恨ダ(正)ナニ樂音寺境内で恥辱とナ……馬鹿を云へ白痴奴……奸佞邪智の身を持って却て人を恨むとは何んダ……此正儀こそ汝の爲めに欺かれ主家へ對して相濟ざる事をせしに……意恨とは片腹痛し、出で索首を落とし呉れんと言も了らず錦織正儀玄蕃が持つたる太刀を掣取り二ツに爲れと斬り附ける(玄)アツト叫んで血煙り諸共其處へドツト倒れました。名に負ふ腕が映て居りますから溜ません真向掛けてカラ竹割に仕し升々是汝より出でて汝に返る惡意の報ひが的面に來つたのでも御座いませう其時善哉正儀と予されたので正儀は思はず蒲鉾小屋の方を眺めますと一人の老

記代一丸德俊

僧朱の衣を着、七條の袈裟を懸け、勿然と顯れ、(僧) 珍らしや正儀見忘
れ、か予は笛吹山の合法なる、正儀の驚き(正) ハ……ハ如何にも
尊顔を拜し思ひ當りました無禮の段眞ッ平御免下され(合) イヤ會
釋に及ばん拙僧の咎むるに非ず御身が忠節を賞するナリ……亦
タ此者は先年秦雅勝を殺害致し、聞法樂の秘書を盗みし、曲者にて兼
て荻葉の方へ一味徒黨の悪人あれば、惡の報ひの忽ち天罰を蒙むり
御身の手に懸りて果たり……正儀之を聞いて再々驚き不思議な
る事もあればある物だと思ひ、只々茫然として暫時思索致して居る
高安殿の此時まで傍らに居られまゝたが合法仙人が申されました
言葉が如何にも不思議のやうに思はれる處から、其處へ出まして懸
懸に(高) 拙者が高安通俊と申者初めて御意を得し……某が一子俊
德丸、今より三年前、貴僧の法力を受けしとが、ありしが既に目前
此風癩にて相果ました……只今御意得るころ誠には是れ天の感應ま

記代一丸德俊

しませ喜隨とやサさん希わくの最愛の一子、俊德丸の身の果を憐み
給ひて往生の蘇回を遂げさせ賜へ……通俊此上もなき喜ぶに存
づる、合法仙人カラくと笑み(合) イヤ通德殿嘆き給ふナ予は是れ
長くも當代の帝桓武天皇の勅により諸國の善人を擧ぐ悪人を糺さ
んが爲め五畿七道の高山高嶺に住ひ難行苦行其度を知らず身は木
喰に心を清め永き年月を経ること凡そ廿有余年其間况々の難苦に
遇ひ迷ひに仙境の道を學び其行を果し其苦を了へ善を救ん爲め假
に乞食に扮し或ひは異行の風を爲して諸國の山々亦たは市町村邑
等を歩行爲す折一年笛吹山に住せし折柄錦織正儀殿足下の一子俊
德丸殿を連れられ婚姻の義を觀相せし呉れと予に御依頼み……予
之れを知ること亦た三ヶ年以前なれども天性の因果は亦た免がる
能はずよつて一度業病を病せ法力をもつて僥醫を與へんと愚僧
も此浪波へ來り已に巧喰の風を爲し朝夕俊德丸殿に付き添ひし甲

斐ありてか、今は疾病氣平愈の時に適へり、夫業病を煩む者、俊徳丸に限らず三世通達の佛、三界獨尊の御身にても脱がる、能はず故、若し佛尊此病を煩らふ時は、皆な斯くの如し、俊徳丸殿は死したるに非ず、予今金丹を與へたれば、暫時にして蘇生すべしと説き示されました

第二十五席

諸高安主従は合法僊人のすされまます言葉を不思議左様に聞ひて居りました、が死したる俊徳ムート斗りに刎通りムックト起て居直りました、(通)ヲ、俊徳か汝の父通俊じやツヨ(正)若様でござりますか(俊)ヲ父上様……正儀も一處かア、懐思しかつた……流石は親子主従の心は同じ善と善恩愛の泣だに咳び、浮む念ひの孝仁忠隨喜に袖を濡しました、合法道人の聲を發し(合)如何に俊徳殿予は合

法なるぞ今日只今其方が病氣平愈したり、見ヨ見ヨと申されまます、から俊徳丸は不斗心付きまます、今迄自由になりません、身体は漸く自由になり相成ますのみか、手足面部等悉く自分の身体のやうに相成、眼中也清しく致して物の色合も爽かに分ります(俊)ハット斗りに勇み思はず知らず合法を恭敬禮拜致しました、合法重ねて(合)予御身を救んと欲せし故、飯に乞喰と姿を違へ、巧頭とあつて共に此處に止まりたり、最疾御身の時運到来せし故、先に金丹を與へ、風癩を愈しめられた、父君高安殿と俱に河内國へ歸られヨ……亦た和泉國茅渟殿の娘、級照姫御身に懸想し、病床に附したれども、予能く之れを知り、遂ひに先日愈したり、婚姻の事妨々あし、亦た參内の期怠るべからず、高安殿并びに俊徳丸錦織正儀等も悉く説き示し、俊徳丸と師弟の約を結び、名殘惜くも合法は何處ともなく立ち去りました、跡に親子主従三人隨喜の涙を流し、合法の後影を伏拜愛い返つて喜びの肩を聞き

記代一九德俊

盲龜の浮木優曇華の咲や此花浪波津を後に勇立ち高安郷へ歸られ
ました
三世曰合法は亦合邦に作りますが何れか事實でおさる升か未だ
之を詳かに存じませんよつて悉く合法と記して置き升亦た俊徳
九級照姫の兩人の事に就き合法の丹精中々容易ではござい升せ
ん畢竟合法が救助致しますのは孝子貞婦等の心情其胸中の美を
賞します故にか斯く迄でに保護致し救助すると云ふは實に奇と
や云わんか將た妙とや云わんか是れ孝子貞婦の徳でおさる升然
れば人たる者は此書の播き給は必ず勸懲の意を忽せに爲し給
はず惡を捨善良の心を發起せられんことを望みます亦た合法は
僊境を去り佛門に歸し桓武天皇の勅を奉じて芳巖大師の旨を悟
りまして善珠法師と相成秋篠寺を開山致した名僧であり升然れ
ば後世に迄で攝津四天王寺の南門の通りを合法が辻とすして右

記代一九德俊

蹟に存じて居り其傍らを俊徳街道と云て傳へられますが實に名
譽なあとでおさる升
復説俊徳九殿は御父高安殿錦織正儀其他に送られましたして歸館致さ
れると一家おぞつて皆な祝辭を申上ると云ふ事で夫に金丹を服さ
れてから風癩疾の腫物拭うが如くカセ落ちまして僅かに一ヶ月を
経ません中に元の美少年に復され玉の姿に歸り花王仁が作りし浪
花津の歌に壁へて御父高安殿が施行の場で贈られし事こそ今は咲
や此花是れも偏へに合法道人の保護なりと父子の喜びは一方で
ございません然れば高安殿は愈々寄る年浪の末を思召して俊徳丸
へ家督相續を爲させ度き由商議を凝せられ給ひ正儀へも種々お談
じ有之る處正儀は異議なき旨を申上妻秋篠を始めとして万歳を祝
くす事でござる升から茲に於て高安殿も殊の外御喜びあつて俊徳
丸君を交野の別荘へ移らせ給ひ烏帽子狩衣を着けさせ仮りに祝宴

記代一丸德俊

を表しました然るに和泉國茅渟の長者の級照姫先頃より俊徳丸と
 結号けで殊に俊徳に存戀致し朝夕思ひを込め四天王寺へ祈誓をか
 けて折る程でおさい升故父母も談考致して何か早く娶りたいと
 願りに此婚姻の事を高安家へ促しますすが如何せしむるか更にはか
 ばか敷く参りません是は善づて風癩の病に係り正儀方へ暫時
 預け中夜中何處ともなく行衛知れず相成て居りましたから只懇
 ろに断つて置くに茅渟方では俊徳丸が大病を深くも存じませんか
 ら密々不審く思つて居りましたが遂には此事も一時中止と相成
 り両親は所詮無き縁と諦められたが諦められぬに級照姫で朝夕
 俊徳丸の御を想像て漫に悲しんで居りますすが只今は最う戀煩ひの
 根を合法道人に絶たれましたから煩ひは致しませんすが只だ苦慮す
 るのみでござる然に此度高安で死たと思ふ俊徳丸が合法
 道人の御影にて東なく歸邸致し殊に家相續を致すに就き茅渟方へ

記代一丸德俊

婚姻の儀式を錦織正儀をもつて申入れると大椽規詮殿の喜ひ級照
 姫の心の嬉さ實に三世如き不辨な者には申盡されません錦織は莫
 大の結納を茅渟方へ贈り歸邸致して先方にて委細承諾の旨を告ぐ
 る高安殿の殊の外喜悅せられ俊徳丸へも此旨を申傳へますと孝心
 の俊徳丸父の慈愛を汲み是れも亦承諾致す然れば茅渟方で大鳥
 隼人をもつて高安家へ使者として同く結納を贈り万事万端是に
 於て整ひましたから大鳥隼人は高安家の暇を貰ひ和泉を指して歸
 る途中只だ一人安部野が原に指かゝる時しも秋の初旬に致して何
 にどなく物凄しく千草にすだく虫の音最と哀れ氣に聞こへ丁度申
 の刻とも覺しく往來の人稀ある道を大鳥隼人の指て急ぐべき用事
 でも御座りませんから徐々此原を過ぎんと致し(隼)嗚呼首尾よく
 級照様も高安の御曹子へ御縁因遊ばすことに成て定めしお心の裡
 はお嬉しかろう實に一對の御夫婦は是れに就ひて何ぞや樂音寺で

記代一九德俊

早良親王の御家臣、大伴立善、奸智をもつて、綴照様を早良親王へ差上げよと無理難題、那時錦織殿の爲めに力を得しが、若し正儀殿が來たらねば一大事にも及ぶべき處、思ひ懸け無き那の場の都合、夫は左様と那の時鳥飼喜内を殺したか、思へば不愜な事を致した……立善が謀ひと知れて居れば殺しおせなん、ダが可愛想な事をしたと、獨り言を申ながら参りますと、アレ……と云ふ女の聲、幽かに耳へ響きますので(集)ハテ合点行かぬ女の悲鳴……ハ、ア兎賊共に強姦れでも致すと見へるテ……ドレ助けて遣り度い者じやと道を急イテ段々遣つて参ると、呼道傳ひに向うの方へ、惡漢等七八人で二八斗りと覺しき女兒を、肩上かまして一走に参る様子、隼人は之を認め(集)汝れと云ひさま、同じ足を疾め、曲者の跡を慕つて参りますが、曲者の一向是れに心附かず(甲)コウ、雲入空藏、出久助、汝達にア褒美を遣るから、其處の庚申堂へ女を放り込んで一杯飲んで呉れ(雲)ハイ有難

記代一九德俊

らおぜいやす……コウ空藏、出久助、熊鷹頭が折角左様言ひなさるから、村へ往て一杯遣つて來よう、ウ(熊)自己厭ダ……(出)コウ、熊汝左様事を言ふナヨ……(熊)自己厭ダ、籠棒奴酒なんザア、斯う見へても何時でも召上がる兄イさんダ……何んダお頭ダノ頭ダノ、テ五体想ナ事を吐すナ、お頭マア何んダ自己が頭てのは立善様、今じや頭ねへ籠棒奴、那奴らア頭じやねへ、高安家の奥方と密通して高安家を横領しよう、と致した事が、顯れ往處がねへのテ、透々頭の立善様へ随がッて自己達と共に、夜盗追劔を仕て居るノ、ダ、那んな奴をお頭と言て溜るものか、ヤイ一角自己ア金は不用から、處女を自己から先きへ振まへ、ヤイ一角と喰て懸ッて参ります(一角)ナ、能く申した、イテ素首を毆落すから、覺期をし……と互ひに挑み争、そい升、最前より此容子を木影に於て聞ひて居りました、大鳥隼人、心中に獸頭、突然オカ、と進み寄りまして、兩人の襟上、ムント掴み方に

記代一丸徳俊

任して二三間向うの方へ放附けました此体を認て残りの賊共はヤ
 ア大變だと一散に逃げ失ました隼人は一角の前に進み(隼)コレ一
 角汝は高安家を馳天致し利さへ盗を働き村民を腦す段、不屈至極殊
 に秋葉の方と謀つて高安家を横領し、俊徳丸君を失はんとせし事最
 疾天誅死るゝに道なし速かに自殺致せ左なくば隼人が一刀の許に
 素首を斬り落とすゾと勇氣凛々として申すので流石の悪人も茲
 に始めて改心致し(角)斯くなる上へは御手向致したとて無益ナ事
 貴殿の厚意に基き速かに切腹致すイザお祝届け下され……(隼)悪
 に強ければ善に強しと世に云ふ如く夫でこそ男子の氣象大鳥隼人
 が介錯致して遣はす(角)并は忝けなく存ずると即ち短刀を抜取り
 まして腹十文字に掻切りました(隼人)美事な割腹適れダゾヨ(角)
 ハ、ア隼人氏お別れでおさるゾヨ、イザ御介錯給はりたし(隼人)
 ヲ、と聲掛け大鳥隼人は豫て抜き持ちました一刀を振り上げ田川

記代一丸徳俊

一角の首を割りました此時氣絶致して居りました熊鷹起き上がりな
 がら此体を見て密に驚き逃げ出ださんと致しますを隼人は心得自
 汝と云さま脳天かけて真ッ二ツに斬り付けました腕がよいのに
 刃劍がよいから熊鷹はカラ竹割に致され血煙り諸俱其場へ打ち倒
 れました是れを見て居ります賤女は大ひに驚き隼人を怖れます様
 でござる升から(隼)女中ヨ必ず心配を爲し給ふナ是れい悪人だに
 よつて自殺致させ亦た此の奴は御身の仇じやによつて我等が斬り
 捨タのだから心配をせんがよい……(賤女)ハイ難有らうござる升
 ……ハイと申して居ります隼人は亦た田川一角の首を風呂敷に包
 み是より致して兩人の死骸を深溝の中へ放り込みました(隼)サア
 女中御身を送り参らせようど彼の女を先きに立たせまして山里
 指して参るるといふ講談でござる升が一寸一息つきまして

第二十六席

大鳥の賊共を追ひ拂ひまして不斗も萩葉の情夫田川一角に出會致して彼れに自殺致させ其首を風呂敷包みに致し賤の女を救ひ夫より道を東南に取りまして頓て一里ばかり参りますると遙か離れし片山里只今も彼の和泉に古蹟がおざる升孤松の傍らに一軒の破敗屋が在まして簷傾き家の周りに蔦桂がはい繁り入口と見へて小き紫折戸があります八重葎茂れる宿の寂しさにと古歌の心を思ひ出され最と憐れに見受けまます賤の女に此處に大鳥を待せ(賤女)お武家様是れが妾の住居でおざる升……實に見苦しき家ではおざる升が只今母に申聞けお言なりとお禮を才上升何卒御窮届でも暫時お待ち下さい(雫)イヤ左様か手は御身を送り届ければ別に用事のない其許の母御に一寸逢ふて参るれば夫で宜い(賤女)ハイ暫時

くお待ち遊ばせと柴折戸を押明け中に入りますと賤女の母と覺しく年四十路にもなりまます美しき穿袴身には鹿服を纏ひ折杖柴を地燈に炬へまして女の歸りを案じ(母)チ、最う日の暮るに間もないがお幾は何をして居る事が早く戻つて来て呉れれば宜いア、案じらるゝ事じや(幾)母さん今戻つて来ました(母)チ、お幾か宜う戻つて来……和女の歸りが遅いので母の案じられてならんから途中まで迎ひに往かうかと思ふて居た(幾)夫はくお氣遣いなことと早う戻つて来る處安部野まで参ると悪漢に出會登目を見る處を通り懸りのお武家様に助けられ御深切に此處まで送つて遣うとお仰つてお送り下さりましたからお詞に従つて参りました(母)チ、左様で有つたか夫はまア御深切な方様……左様して最うお歸りのか(幾)イエ表にお待ち遊ばして……母さんに遇ふて往くと被仰つて(母)左様ら汚苦しいが此方へお通し申責てお禮ても申す程にと

記代一丸徳俊

是れから母女柴折戸の表へ出で懇懇に大鳥を請じ稿の席も新しく
 (母) 是れはくお初にお目に懸ります、妾の女の母……菊と申ます
 ……亦た今日は不斗女幾が旦那様のお影けて危うい難儀をお救ひ
 下され有難う存じます(単) イヤ左様厚う禮を申されては赤面致す
 予は和泉へ歸る者じやが安倍野原を通り係ると御身の女兒お幾殿
 とやらが不斗悪漢等の爲めに強姦れんと致せし故へ救ひ得さして
 直に別かれんとは存じたが、イヤ待て、一人是れより歸さば亦た悪漢
 に匂引され再度の難儀に遇はうも知れぬと存し、此處まで送くり參
 ろつたが失禮ながら御身等母女田舎に稀れある行儀作方連れ由緒
 ある者と見受るがナント可然き方へ女兒を使へさする心はなきか
 若し其意があるならば拙者が主家へ推舉致し御身等母女を取立て
 んが何んと左様致されては何様であらう(母) お愧しい事ながら
 尋ねに附き申上升元私等は紀州の者仔細あつて先ッ年、良夫は悲業

記代一丸徳俊

の最期を遂げ便る處も波瀾こぐ天の小船の綱きれて放果く送くる
 母女故卿を後とに此處へ来て貧き家の借り住居是れと云ふのも吾
 々二人本良亡父の仇討として其本懐を達せんものと明け暮れ仇人を
 附け親へども不幸にして廻り會ず夫で斯うして居ります(単) フ
 ……ソシテ其仇は何れ如何なる武士にて姓名年齢御存じなるか夫
 れさへ知る上なれば某も一樹の影け袖摺り逢ふも他生の縁助太刀
 爲して進ぜまい者でもあいが其仇は何んど言るゝや……(母) 世に
 御深切な方様妾母女を斯く迄でに思し召し下さるのは有難い事
 ながら是ればッかりは(幾) 母さんの言ふ通り御深切な旦那様のお
 言ふれど(単) 言れぬ者を強て聞くも及ばぬが……某は和泉の長
 者茅淳規詮が家臣にて大鳥隼人と云ふ者じやが(母) エ、……(女)
 左様なら貴君が(母) 女……(単) 合点往かざる御身が振舞某が姓名
 聞ひて何か覺へが(母) (女) イ、エ……(単) 然らば何にしに驚きし

記代一丸徳俊

や(母)ハイ驚きましたは……斯様でござる升……此處は和泉の御支配にて茅渟様の御領分其御家臣が御出とは先ア珍らしい奇しきな御縁ぞ存じまして妾も女も山住の身を愧ました故てござい升必ずお氣遣ひ遊ばしますナ(集)左様か然らば夫に附きテ相談があるか何と乗る舞イカ(母)ハイ夫は……(集)今度主君規詮殿の姫君級照様河内の長者高安家の御曹子俊徳丸君へ御縁談の義相調ひ近々和泉より河内へ御入興により侍女を招抱へんと已に諸方へ達せしかど未だ可然き者なれば某も諸々を詮義致して居りしに今日主君より入興の義につき高安家へ参り其戻り道安部野が原へ來かゝる時しもお幾殿の危急を救ひ見れば此邊りに稀なる婦人と存じ送る序に親御に遇ひ様子によつて招抱へんと愚考致して参りつたが何んと聞ひては呉れまいか(母)夫は先ア何よりの命せ當國の長者様の姫君に仕へ参らすれば願ふてもなき僥倖……コソお幾

記代一丸徳俊

其方は僥倖者じやぞよ……苦き胸裡押隠し隼人の前を繕ひながら袖に泪を押止めまして(幾)ハイ茅渟様の姫君に使へ参らすれば亡父上も草葉の影で嘸お喜びでござるま升……母さん何卒左様して下さんせ(母)ヲ、能う云ふた……若しお武家様左様なれば兎も角も妾はあくともホンノ水仕の遺棄者何卒お目懸けられて下さりませ(集)イヤ夫は拙者が計ひ申す(母)左様おされは貴君様今宵は何はあくとも泊り遊ばして此茅亭に御寛りとお休み明日お幾を御同道下ださりませぬか(集)ア、宜いともく然らば今宵は月を詠め一泊御無心致ろう……(幾)左様なれば旦那様妾の母に髪結て貰ひます……緩々お休み遊ばしませ(集)ア、宜い左様致されヨと隼人は脇を枕と致し(集)ア、今宵は秋の中旬と言ひ山中の月は亦た格別興を添るものダ……御言を申しながら楽しんで居ります處が此家の貧家に致して親子活々に暮して居るので月の夜の燈火も

なく月光りで凌ぐと云ふ實に憐れでおさる升彼是致す中夜は更ゆ
 くに従ひ消々たる谿川の水音高く索々たる松風の聲響き隠々たる
 狐蘭菊の叢に潜れキヤン／＼と鳴く聲如何にも物懐ふおさる升狐
 の鳴く聲をキヤン／＼と申と夫はコン／＼だらうキヤン／＼とは
 狐ではない雅子だらうと被仰る方がありますが狐がコン／＼と鳴
 くと申しましたは誰人が申た事か三世は殆んど覺へがござるませ
 ん只今も存生で居る猫八と言ふ奇人は是れは動物の物真似を致して
 狐狸猫犬其他狼種々况々の鳴き方を研究致して居る藝人此男が申
 しますのには狐ハコン／＼ではないキヤン／＼と鳴くと申されま
 した是れは何様でも宜いのでは御座る升が御参考の爲めに申上置
 き升隼人の仲秋の月に閑静を添へ心地よく一睡の轉寂を致し冷き
 風に目を覺しますと此家の母女何處へ参りましたか未だ何ん等の
 沙汰もありません(隼)何んダカ薄氣味が悪い若しや狐狸ではあ

かと疑いまして徐と起上がり四邊を見ますると傍の窓障子月影け
 に母女髪結ふ况の映りますので(隼)ハ、ア月光りで髪を取り上げ
 て居るか何にしても外表に居るハ合点往かずと思ひ窺と障子の穴
 より覗きますと孤松の下に稿席を敷楡笥鏡臺を据母の女兒に髪結
 あがら何にやら狐鼠々々談合ッて居ります(隼)フ……ン髪を束ね
 ると亦た格別の美人に見へるヲとまふして暫時恍惚として居りま
 す中女兒の頓て鏡を抱へ家へ還入つて参ります隼人は寝た形状
 を致して居ると(幾)若し大鳥様最うお休みに成りましたか大鳥様
 お風邪を召すと往けません若し大鳥様……ヲ、能くお眠ましたと
 云ひながら隠持つたる短刀を逆手にどり(幾)父の仇覺期しる……
 乙女に似氣なく柄も徹れと咽喉目懸めて貫きかけました是れから
 如何が相成りまするか次席に申上

第二十七席

(十四百二)

記代一丸徳俊

鳥飼喜内の遣送お幾は隼人を突ツかたましたたが隼人は些か油断を
 せず、ハット首を右に向け右腕取ッて起上り(隼)アイヤ物をも言ず
 理不盡に何に迎て吾を仇と覘ふや(幾)ヤア理不盡とい情けあい現
 佐父の喜内を手に懸け仇たる身にて理不盡とい、口惜い情けない
 ……母上様助太刀して殺して下さいエ、母上様と身を奮はし狂氣
 の如く悲き哀み叫ぶので母のお菊は狼狽より家へ馳上がり(母)
 マア待ちやコレ女兒…コレお幾…(幾)エ、情けない母上様現
 在仇人が居りながら可弱女の勞腕で討つこと叶ぬか…ア、情け
 ない情けないと悶へ震はし焦ります(母)コレ女兒焦立ナ…若し
 隼人様妾が言ごと一通りお聞き被成て下さりませ…妾母女は去
 年の秋樂音寺にて御身の爲めに墜ち果されし鳥飼喜内が妻子に侍

記代一丸徳俊

(一十四百二)

ると云ひ差しての亦た悲歎に咳び(母)御身の爲めに夫を討れ母女
 路上に迷ひし故、住馴し故郷を跡に此和泉へ復来て、一ト太刀あり
 仇を斬り、亡本夫へ脩羅の亡執を晴さんと朝夕御身を付け覘ひ時
 があらばと思ひしに今日は如何なる吉日か御身が此家へ来られし
 を饒伴と喜内殿の仇を復さんとは思ひましたたが女兒お幾が危急を
 救ひ助けられて恩義に絆れお幾へ篤と意見を爲し…是非もなき
 事あれば締めヨとは申したれど母親の口から最嗚呼ケ聞敷くは
 得共、夫は親孝心な女、一時は仇の御身なれども、今日救はれし恩
 義により妾は先刻申聞ケ決して手向ひ爲すなどやせし一筋に仇
 と思ひし故無禮の段は幾重にも母が變つてお詫ひを…隼人殿
 何卒御了簡して助けて下されコレ此妾が拜ます(隼)イヤ面目もな
 い鳥飼喜内殿の妻子でありしか、お幾殿待たれヨ…改めて大鳥
 隼人和女の刃に懸りやす決して畢竟な舉動の致さんとお幾の小手



記代一丸徳俊

を放します、幾の泪と俱に差俯向き暫時言葉もありません(集)ア
 イヤお菊殿今更未練は御座らんか先刻も申通り今度姫君入興に附
 き主君の命令反くに道なく臣下は主に仕へて忠義を盡すが習ひ亦
 た人として之れを知らざれば禽獸にも劣るとかや然れば度今姫君
 の入興相濟み主命果てし其後ちにお幾殿の爲めに討れん——不本
 意ながら夫迄ての暫時命を某に預けて呉りやれ——亦た御身が本
 夫喜内殿を刀に懸けしも是れ私事ならず全く是れ——云々(既に
 本編第十九回廿回の両端に於て述べました通りを説き)主君の一大
 事によつて不得止撃ち果たせしが思へば不慙ナ事をせしと後悔臍
 を噛むも亦た詮さし然れば紀念の爲め樂音寺境内へ喜内殿の塚を
 築き級照姫を始めとして吾が主人規詮殿與方を伴れ態々樂音寺へ
 御越なされ僧侶に申付けて既に供養も致せしは是れ衆人の知る處
 神明佛陀も認るゝ處契つて虚言に非ざれば暫時命を貸給へ主用果

記代一丸徳俊

せし其後ち急度お幾殿に討るゝ所存——ノウお幾殿と信義を分
 けし大鳥隼人が詞に母子は感じ入りワツと斗りに泣き倒れ暫時生
 体中々に面さへ上かぬ貞婦と孝女お菊は泪を袖持て拂ひ(菊)勿体
 ナイ其お言本夫喜内に大恩ある大尉規詮様の姫君妾母子が今日ま
 で寒暑を凌ぎ世を送りしも皆な姫君のお影あれば何んで今更貴君
 をお恨み申しませうぞ何卒御了簡遊ばして(集)イヤ左様申されて
 は面目あい、狸諺主人のお爲めにもせよ重大罪なき喜内殿を手に掛
 けし上からは阿容く生ゆる所存なし、主用果せし其上にて急度お
 幾殿の手に懸り立派に討れて死する存心——お幾は何にを思ひま
 したか再び短刀取直し傍に脱ぎし隼人の衣類を手早く取りて少サ
 ット刺し(幾)父の仇思ひ知れ(菊)ヲ、女兒出来ぞ夫であそ亡父へ
 對し追善俱養の紀念ぞや——モシ隼人様女兒お幾が孝により仇大
 鳥を討止めました今日より女兒の婿とあり未の未まで友じら賀旅

記代一丸徳俊

の宿りの三世の縁女兒お幾を妻として不束ながら憑みます(集)事を分けてのお依頼なれど仇の予を婿としては亡父へ對して相濟ま
い——(菊)サア夫故に仇人のお幾が討て恨みを晴せば世に仇人は
なき道理——ヨシヤ御身が仇にもせよ遇ぬ先きある仇なれども委
細を聞きし上からは何んの仇とは思ひませうぞ亦た今宵の宿りに
て御身をお幾の本夫とするも亡吾良の誘導給ふに相違なし——ハ
ウお幾(幾)母さんの被仰る通り準人様妾の亡父に成り變り規詮様
の姫君に仕へて忠義を盡します(準)イヤ通れある母女の胸中然ら
ば其意にも任せずと是から假に三人水入りの盃を取り換し準人お
幾は二世の興りを交しまして翌朝一度準人は茅渚の館へ歸られま
した

三世曰く大鳥準人お幾の物語につき此他種々説話がござる升が
紙數の定限により詳細に辨じ上げ兼ます之を辨じて折りますと

記代一丸徳俊

本文の主人公即ち俊徳丸の條が余り縮少致すことでありますか
ら成べく省きまして中上升準人は茅渚の館へ歸參致して高安家
にて承諾の旨并に歸途安倍のケ原にて田川一角に出遇自殺致さ
せし次第且つ一角が萩葉の情夫にて是れまで兩人奸策を廻らし
高安家を横領致そうと思ひ生駒の小冠者奇妙院との二人を殺し
其上秦雅勝を謀りしこと等を規詮殿へ言上に及び就ひてハ鳥飼
喜内の妻子に遇ふて云々の事より斯様くにて夫妻の縁を結び
ましたが主君へも伺はず致せし段重々恐れ入り奉まつると言上
せしに規詮殿聞こし召て嘆賞の余り準人の忠勤を褒め鳥飼妻子
の志ざしに感ぜられ改めて準人を鳥飼の養子と定め大鳥を改め
鳥飼準人と名乗せお菊お幾を大尉の館へ迎へ級照姫の待冊と致
させましたから級照姫の喜びお菊お幾の嬉さ昨日に變り今日は
花咲樂みに逢ふと云ふ次第でござる升夫とは打て變つた俊徳丸

の繼母萩葉の方の錦織正儀の斗ひにて假に座敷牢へ押込められ
 て折りましたが漸々悪事露見に相成見る影げもなき形状に至り
 顔色憔悴致し腫物を發しまして殊に毎夜々々蠢き叫び助けて呉
 れくど最困し氣に狂ひますが是れが所謂神經病で迎も最悪
 事が露見しては遅かれ疾かれ死ななければならぬと思ふ處か
 ら遂ひに神經病を發しました人盛んあれば天に勝つと申升が成
 程左様で萩葉の如き悪逆無道ナ奴でも盛んあるときり崇りもご
 坐いませんが斯うなると禍ひ其身に報ふで夜々々秦雅勝小冠者奇
 妙院等の亡靈が顯れまして髪を引摺亦た口を裂き或ひは身
 体を付け吐息を此めします其困しみ實に地獄の阿責も斯くやと
 思ふ斗りて認るも怖しき形状であります然れば二三人の男子を
 晝夜検査として付け置きますが其等の面々も驚く程であります
 是れより俊徳丸のお話に移ります

第二十八席

延暦三年十一月此時の帝(桓武天皇)新内裏御造營につき奈良より致
 して山城國乙訓郡長岡へ臨幸あつて遷都の儀式を執行はせられ朝
 政豊饒に諸臣皆な万歳を唱へ祝賀を奉じます然れば庶民一般天皇
 の恵みを奉迎致し市街村邑は云ふ迄でもなく鼓服して宴を開き目
 出度き御代を謠ふて居り升此時に當つて諸國の美少年神泉苑に参
 内して童舞興行爲すべきの處未だ神泉苑落成せざれば勅伍あつて
 仮に攝津天王寺に於て踏舞の稽古致すべいと達せられました然れ
 ば當撰さるゝ諸臣の美少年皆な攝津天王寺に群集致し天皇の御感
 に預からんと各々稽古を勵みます中に河内國高安郷高安左衛門少
 尉通俊殿の嗣子俊徳丸は傳冊錦織大藏正儀を伴ひ其他從者十有余
 人を召連れまして参り舞場の此傍へ着座して居ります中番替り

番がわり途ひに俊徳丸の着席と相成りました此時夥多の俗人音楽を奏し管弦横笛箏葉の調へ五常青海鷄得を頼合す其音律清寥とし澄渡り恰も仙境に居るの思ひを致すと言ふ實に世に人の胸裡を娛ましむるものは音楽に優るものは御座りません俊徳丸は百濟の味摩之が作る處の面装束を被け悠々として舞場に懸り音楽に連れ秦雅勝が秘曲とする處の法樂を徐々として舞ます其手振足の踏方一
 点の淀みもなく實に天性備るの技藝ともすべきかで中々第四五の少年が致す藝とは思はれませんが然ればにや夥多の俗人は言ふに及ばず舞場に連なる衆重其他觀物の人々并ひに従者の面々耳を傾け目を澄して感じ瞬間もせず静まりかへつて見て居ります頼て舞納めんど致す時年頃十九か廿歳にも相成ります美人男ども女ども分け難く太鼓の役を勤めて居りまじたが装束を被け烏甲の儘突然俊徳丸の侍冊錦織大藏正儀の前へ人もあろうに突くと進み「ヤア珍し

や錦織大藏見の警良夫の仇覺期しやと言ふより早く探に仕込みし
 劍を抜き斬つて懸るに驚く錦織ハツと此方へ身を返し鎖扇持つて受け止め受け止め右へ拂らひ左へ拂ひ打込む劍を扇子のあしらい
 (正)「アイヤ何ん人なれば此正儀を警と観ふや正儀未だ覺へがな
 ヤア畢竟なり未練なり仇でないとい——(正)御身は女子か何故に
 「何故とは其一言妾は秦春緒が妻にて小式部と言ふぞか去る
 延暦元年の頃汝の爲めに眞人を討れ剩さへ良人まで烹殺せしは奸
 惡無道の大悪人——サア罪を名乗つて勝負をしヨヤ……女ながら
 も仇討せんサア聖つ討れるは天道の誠に任せんサア速かに名乗ら
 ずやと女に似氣あき舉動に踏場俄に騒動まして上を下へと混雜致
 し居並ぶ人々氣を失ひ呆れて暫時茫然と致して居りました正儀聲
 かけ(正)「アイヤ小式部とやら御身の爲めに鑿るゝの易けれども言
 れなくして正儀が討れたと言れては諸人の手前面目かい仔細を聞

ひて如何にも我誤ちの箇所あらば速かに御身に討れん劍を納めて
 其事情を物語られヨ……小式部此一言を聞き天性伶俐な女でおど
 いますから如何にも正儀の言ふ如く事實を糺さんければ仇か警で
 ないか自分は仇と思ひましても亦た何様云ふ事があるか相分りま
 せん只荻葉の方に申されました言を便りと致して正儀を仇と思ふ
 だけてありまますからキツト心を取り直し(小)如何にも御身の云る
 通り仔細言ねば分らぬ道理先年高安殿の御館に於て妾が姑荻葉
 殿の一子成弱丸へ秦の家秘曲聞法樂を授ける時柄眞雅勝殿の實
 子春緒殿仔細あつて其頃勘當の身とあられ給ふ故無據成弱丸へ傳
 授すると云ひ給ひしを妾が良夫春緒殿和泉の商人より噂を聞き俗
 人の家に生れながら仮令勘當の身にもせよ現在春緒がありながら
 成弱へ秘曲を傳へるとは情けないと實父雅勝殿を恨み死さんと覺
 期せられしを妾が漸く慰め参らせ高安殿の御館へ雅勝殿が参る

途中高安明神の片傍松並木にて父子の對面其時は云々にて(既前
 回第十四席に於て頭會致したる手續より荻葉の案内によつて下部
 に扮粧傳授の次ぎの間へ導かれ夫より其夜雅勝を殺害せし曲者あ
 つて春緒が疑ひを蒙り田川一角に曳れて遂ひに煮殺されしは是れ
 全く錦織大藏正儀が所爲にして俊徳丸へ雅勝が聞法樂を傳授せざ
 る故返つて其れを意恨として父附を殺したと荻葉が前條に於て小
 式部へ申せし事を逐一陳べ(小)夫故女ながらも眞良夫の仇なれば
 一ト太刀なりとも正儀を恨の刃に斬りて見ヨと云る、故三年以來
 身を乞食にやつし亦たは人の情けによつて和泉河内攝國に徨歩
 行し時も時り大標規詮様の御家來大鳥隼人殿の救助に遇ひ姫君様
 の侍女となり暫時無念を忍びし時柄今日天王寺に童舞いの興行あ
 りしと先の日聞きし其嬉さ皆は錦織天藏殿も俊徳丸君の傳冊なれ
 ば此興行の舞場へ來るは必定と胸に問ひ獨飛び立つ嬉さを押包み

記代一丸徳俊

良夫が敵へし太鼓の一手、覺へ習ひし技藝を便りに姫君様に暇を賜はり、今日此舞場へ臨みしは天の感應まします吉兆、サア正儀殿夫にても包み隠して居らるゝやサア錦織大藏正儀殿勝負は時の運定めイザ立ち上がったてサア、サア一生懸命一念込めし孝實真心正儀感涙を流し(正)アイヤ小式部殿婦人に稀る其許の心体適れ賞すべき舉動なれども此正儀は仇を受けし覺へはあ(小)ヤア未だしても包み隠し仇でないとは何に故へかサア其證據を擧げられヨサア證據なければ正しく敵に相違ない……サア勝負セヨと詰り寄られ正儀の當惑致して(正)其證據は御身が良夫春緒に逢ひするの何により證據(小)アノ春緒殿に……何んで殺されし春緒殿が(正)ヲ、其疑念尤もなれども其には深き仔細ぞある(小)サア其は(正)秦春緒是れへ参らられヨ此時樂人中より舞裝束を被け、陵王の面を冠りし一個の若者手は寶劔を携へ、錦織大藏正儀の前に扣へ、陵王の

記代一丸徳俊

面を取り扱け(若)ハ、ア命せに任せ秦春緒御意得ます(小)ヲホ懐慕や春緒様宜う生へてで御さんした(春)小式部で有ツタカ(小)ハイ……と云ふも口籠り先だつ涙女義にワット斗りに平伏します春緒は之を思ひ(春)小式部三年此來只一人難義を忍び能くマア無事で居て呉れタ(小)ハイ貴郎も御無事で能うマアお出遊ばしました(春)是れと云ふのも皆な錦織殿のお影(小)サア夫は(春)過し延歴元年彌生の頃繼母萩葉に誘はれ和女に別れて高安殿の御館へ参り庭園より密かに忍び入り聞法樂傳授の次の間へ参り襖越しに父雅勝が成弱丸へ秘曲を授け給ふ處彼れ生來の魯鈍と見へ父が授くる秘曲を覺へず幾度もなく教授するも更に一として覺らざれば父も呆れてア、遺憾なることしてけりと口には云わねど其様子面に顯れ夫故にか吾方を目にて知らせ覺れと曰まく欲する顔色ア、忝けなし父なればあそ斯く迄でに子を思ふかと吾が放逸を心に恥

記代一丸徳俊

影ながら詫び瞬もせず意に八百萬神を念じ一身不亂に目を止め漸くにして見佛聞法樂の秘曲は得たれど如何にせん其夜賊あり父を殺して秘曲を奪ひ櫻樹に上りて何處ともなく立ち退りしも予其賊をチラリと認たれど父の仇とは心付かず後にて聞けば彼ぞ全く父の仇……聞ひて初めてヤア残念無念と心張裂思ひひなせども何處へ逃げしか影ゆだも得知れず夫のみならず吾れも亦た忍びの者と思ふ故へ見咎められては大事と心得ソツト築山の影へ身を潜む中館の人々曲者を詮義の爲め其見廻りとして田川一角從者を引き連れ入り來たり某を見て曲者と誤認り父を殺せし大罪人御前の前にて自狀しやど理不盡にも捕縛なし其翌朝の事吾れは高安殿の御前庭にて吟味せらるゝ其時栲織母萩葉殿出來り以前に變る恐口雜言遂ひに吾れを親殺の罪に陥れ刑もあらうに釜烹の義を申し出てしを仁慈賢明の高安殿錦織どのと諸俱に厚き情けを垂れ給ひて某

記代一丸徳俊

の冤を救はれ繼母の手前は某を烹殺したりと云いなして他の罪人を釜烹に當て此春緒をば助け給ひしは是れ皆な錦織正儀の義心によれば無禮を爲さず吾が是れ迄での恩典を厚く和女より云ふて呉れ……小式部は暫時良夫春緒の申す詞を聞き悲歎に呉れて居りましたが心の裡ちて(小)ア、勿体ない……斯く迄でに良夫を保護して呉れる正儀様を知らぬ事とは云へ永の年月恨みし此身何んぞ云譯け致そうかと思ひますと今更面目あく面赤らめて居りましたが思ひ返へせば残忍無道な萩葉殿の奸策妾までを欺むきて此始末に致させた大悪人と心に納めて錦織に向ひ(小)始めて迷ひの雲が晴れ——罪なき貴君を今の今迄恨みました怖しき今更面目もなき次第何卒お寛し遊ばして、ノウ正儀様知らぬ事とて現在貴君に白刃を向けし此身の罪……(正)イヤ小式部殿左のみ歎くに及ばぬ……斯く相わかる上へからは此正儀も安堵致した御身が眞實感じ入ッ

た(小)ハイ難有き其お言夫に付けても不良なるは繼母殿可弱者と
悔り妾を欺き永の年月心苦をさせ剩つさへ罪なき人を罪に陥し其
れ心の娛みどしたりしは返すくも残念す此恨み思ひ知れや萩葉
の方と女の一念さしも優美小式部が怒りの面を現はしませて人目
も恥ぢず萩葉の方を罵りました是れより萩葉の罪障消滅に至るお
物語り次ぎに申上り

第二十九席

引續き升た俊徳丸のお話も最う些かで大尾に相成ます定めし拙き
演述で御退屈を相掛けましたが何卒迎もの序でに全尾まで御覽を
希ひ上り諸侯雅勝の一人春緒の錦織正儀の爲めに冤の難を免がれ
最愛の妻小式部に久々面會を致し互ひに無事を喜びましたが春緒
も小式部も只だ遺憾なのハ繼母萩葉に謀れて彼れが思ひの儘に父

雅勝を殺し且つ最愛の良夫を冤の罪に陥れさへ恨みもない錦織に
意恨を重ねさせました其逆意の怖しさに身の毛も逆立やうでおさ
の升が兩人は如何にも残念で堪りません其處で錦織正儀に此事を
深く語りますと(正)實に恐むべき奸婦ではあるが吾が主君俊徳丸
殿にも繼母なれば御身達も繼母と一旦なしたれば如何に残念で
も刀をもつて打ち果すと云ふハチト穩かでない併し彼れは最疾靈
に捕へて坐敷半へ入れて置いたが此程番卒に聞く處によれば時々
妙な事を口走り丸で狂氣致して居る有様だと申すが察する處是れ
は在悪の亡ぶる時節到來致したる證據なり且つ御身の亡父雅勝大
人を殺害致したも全たく彼の所爲とは云へ手を掛けて殺た者は早
良親王の家來なりし大伴玄蕃と云ふ奴是れハ先の程予主君と供に
俊徳丸殿の行衛を探索中天王寺の南門にて出會直ちに打果せしが
聞法樂の秘書は彼れ所持せず是れハ如何致したか相分らんが何に

記代一丸德俊

しても、母人は過半亡びて仕舞たけれども萩葉の方は今云ふ通り繼母と云ふ二字に死じ指て罪する分けにも行くまいが、是れは何れ某が主君と協議の上にて取り斗らひ致すから暫時御身夫婦は恨みを忍び給へど正儀は春緒小式部の兩人を諭て居りますと住吉の伶人東義輝人其座へ進み出で俊徳丸君の御手を取りて(輝)若君へ東義輝人改めて御意得度き事あり先ツ是れへくと正席へ据へ(輝)諸錦織正儀殿東義輝人が改ためて申入れ度き仔細が座れば一通りも聞き下されと云ふより早く前へに佩ました小刀を探るかと思へば腹へツザツト突立てました俊徳丸の云ふに及ばず春緒小式部大ひに周障は何故と驚きます(正)アイヤ東義輝人此場にて生害とは何故あつて……輝人苦き息を吐き(輝)俊徳丸君の孝心錦織正儀殿忠節によつて道ならぬ事とは知れど之を知らずと申時は伶人の恥辱のみか孝子俊徳君朝廷の御覺へ如何と心得一義に及ばず

記代一丸德俊

見佛問法樂の傳授は致せしが今更云ふも愚に似たれど何をか包まん是れ吾が家の秘書に非ず全く秦川勝より雅勝代々の秘曲なるは吾が云はずとも伶人等の能く知る處然かるに先年仔細あつて早良親王の家臣大伴玄蕃と交誼を通せし折柄見佛問法樂の傳書を持参し予秦雅勝に意恨あつて討果せしが幸ひ彼が所持爲す問法樂の傳書を盗と取り参りし故其許の重寶と爲さず是れ伶人の名譽……御身に就ひては必用の物あれば百金の價にて求め呉れヨと申により某思案致せども如何にも大伴の申す如く是れ伶人の家に無くて叶はぬ重寶故人の財を貪るとは知りつゝ、百金の價にて玄蕃の云ふに任かせし所時も所り幸ひ正儀殿の依頼により俊徳丸君へ傳授せしは是れ秦雅勝殿の家に傳る問法樂……此れ秦氏の御子息春緒殿、聽るゝ如く御身の父を害せしは大伴玄蕃と云ふ者なれど彼れは惡報によつて正儀殿の手に懸り己に此世に居らざれば恨むとも亦た詮

記代一九德俊

なき所為なり予輝人は假令雅勝殿を害せずとも不義と知りつゝ雅勝殿の家に傳る秘書を買取り今日までも過おせしは是れ亦た罪の免がれ難し未だ其上に云ふべき事は其許の妻小式部是れを正しく吾が娘(小)ヲ、妾を娘と云ひ給ふは何ぞ證據がござんすノカ(輝)證據無うて云ふべきか是れ此れを認ヨト首に懸けました守袋を疵所に弱ッて居りました東義輝人血汐に染みし錦切出すを小式部取り上げて(小)ヲ、如何にも妾が持ちし守袋と些ども違ぬ一ツ品……左様なら御ま衛が父上でござんしたか……お懐慕おざんす(輝)娘堪忍して呉れ親といふのも面目ないが言ねば是非が判別ぬ故へ最期の際に輝人が言て聞す……小式部の胸一杯になりまして只先立つ沮に父輝人に寄り添ひ悲歎に暮れて居ります春緒正儀俊徳丸の三人は余りの事に仰天致し暫時言葉もなく差俯向ひてあります(輝)予れは元大和國郡山の里正なりしが若氣の誤りにて妻を捨て

記代一九德俊

其頃御身が二ツの年家出を爲して諸國を漂泊難義に難義を重ねし上遂ひに此攝國に足を止め伶人東義の家へ便り性來樂を好し故へ先師の眼力にて養子と爲りしも殆ど茲に十五年故郷を去りしは十九年既のあと東義の養子となりし頃……ア、國へ置きし妻や子が定めし難義を爲したてあろうと心付きしも返らぬ愚痴とは思へども今に忘るゝ暇もあく丁度今より九年前人をもつて尋ねし所妻の此事を氣に病て和女が五歳になりし頃病死せしと村人の風評夫から家の断絶なし女兒は今に行衛知れず生死の程も分ぬと言ふなどながら只だ手がりの母が情けの守袋生前の折り其子の頸に懸け置きしは萬一後日家出せし父に廻り逢ふも知れぬと予が不實を憎みもせず實意を盡せし吾が女房亦た和女に別れし時幼兒面に見覺わりしは左りの眼下に(ホクロ)が証據……此春緒殿面目あいが聞法樂の秘書は吾れよりお返り申すサアお受取り下され……親と云ふの

記代一丸徳俊

も取かしきから小式部の貞に面じ末の末まで小式部を依頼ます…
 俊徳君寛し給へ今春緒殿へ傳書を渡せば雅勝殿と覺し給ひ是れ
 より後は春緒殿を師として舞學をなし給へ正儀殿御慮あれ(正)
 輝人殿早まりし予聞法樂の一義につきては一命捨る程にもあらん
 に嗚呼是悲もあき事を致されしヨ此上は正儀一腕を添へ春緒小式
 部殿の身の上急度引受け申したり(春)勇殿氣遣ひ召さるナ正儀殿
 の義心あれば拙者夫婦の身の上は安堵致して往生あれ…吾が父
 の遺物他へ轉せずして縁ある御身の手に入らばこそ今日只今吾が
 手に戻る是れも偏へに父雅勝が導き給ふかア、忝けあし只だ死す
 る御身の不愍サ(小)父上悲ふござんす最うお別でおさる升か(輝)
 斯く打解ける上からは此世に申置事あし苦痛をせんより早く彌陀
 の淨土へ趣かん俊徳丸君此輝人は死するとも御身の影げに添ひ奉
 れば夢々稽古を怠たり給ふナ(俊)イカニモ東義大人の言るゝ事吾

記代一丸徳俊

亦た未練であるとも天子の敎感ナと洩すべきぞ且つ其許の功に免
 じて父高安に依頼秦の家を再興なさせん心残さず往生せよと流石
 一旦師と依頼し輝人のこととござい升から俊徳丸は最と憐れに思
 召しハラ〜と落涙せられます大藏も俱に悲歎に暮れ(正)必ずと
 もに輝人殿氣遣ひせらるナ(輝)其の有難し有難し是れを冥途の土
 産となし雅勝殿へ廻り逢ひ死出の旅路で詫び申さん…小式部健
 固で居られヨ(小)ハイ御父上最うお名残でおさんすか…云ふも
 得言ぬ胸の裡ち堰來る沮止め敢ぬ岩に砕けし玉水の思ひは同じ親
 と子が愛別離苦の悲みは實に俚諺るに堪ません輝人此時腹十文字
 掻き斬つて敢果消ゆる玉の緒を繋ぐよしなき最期の際終る命の夕
 まぐれ諸行無常とつく鐘は那の地へ知らす片便より遂々此天王寺
 に於て自殺致して相果ました小式部の愁傷云わん方は御坐るませ
 ん併し人間は無常の体と申升から毎何ん時何様云ふ譯けがありま

すか殆んど相分りませんが親子兄弟夫婦姉妹の間此愛別離苦と申あどが實に厭なるもので然れば俊徳丸錦織正儀春緒の三人は悲嘆に感じて死を憐れみましたが就中小式部に於ては今迄両親はないと思つて他人の手にて養育致され艱難苦勞を致して娼妓にまで相成遂ひに春緒に身受け致されるが否前申上り通九通り亦々生別かれと相成且つ漸く正儀の影かにて死したりと思ひし其夫春緒に面會するが否や亦た現在の親に別れると云ふ不倖實に目も當られぬ始末てござぬ升俊徳丸殿は深く之れを憐れと思召して御父高安殿へ才上げ禪人の死体を其儘天王寺へ葬り春緒小式部に改めて祝言の式を致させ秦の家を再興させられました

第三十席

お話と云ふものは具に結局が六ツヶ敷いもので始まりはお聴遊ば

す方が面白くないが作ります方での余程骨が折れます是れは誰お話に限らず皆左様で中程から段々面白く相成つて末尾が面白くないの極つた様なものでござい升……處が此末尾が實にチト面倒で片付ける者は片付けて仕舞生ず者は榮させ無用者でも捨て仕舞ましては全篇の脚色に係りますから是も宜い掬梅に致して置かんければ成らんと云ふのが話の趣向であります三遊亭圓朝主の著作ました牡丹燈籠と申す速記法で致した冊子が先頃出来まして殊の外大評判でありましたが成程面白には違ひありませんが那の中第九篇より十篇へ係ります處にお露お米の亡靈新三郎を執り殺さうと致して悪漢友藏に依頼百兩の金を遣つてお札を刺させ其影げにて新三郎を執り殺すといふ件りの處は至極尤もでありますか後ちに友藏が已れの悪事を隠さうと致して幽霊を玉に遣ツタ様に書てありましたが友藏が悪意を隠す爲めに致したものでなればお露

記代一丸徳俊

の父飯沼平左衛門は無用者而て見れば黒川幸藏の倅幸助が飯沼を殺すにも及ばず飯沼が亦た黒川を殺す道理はないと云ふやうな事に相成ますと實に話になる種を失つて仕舞ます是れは何も圓朝氏を悪く申すのでは御坐りませんが只始尾完全の善いと悪いとで話がお話にあらず相成と云ふ譯けの處を一寸申上りのみで所謂他人の疝氣を痛頭に病の仮令でも御坐いませう、皆て高安家に於ては通俊殿錦織正儀をお召しに相成種々協議の末春緒小式部をお招ぎに相成萩葉の方を出陣致させ面會に及ばせまますと流石の毒婦も今は包むに詮なく致して遂ひに悪事を一々白状致しましたから通俊殿は不愍と思召て春緒小式部の兩人を宥め(通)春緒是れまで萩葉の爲めに親雅勝を討れ且つ其上ならず其方までも冤に陥る處でありし故定めし手を下して彼れを討んければ遺憾ではあろうが君子の其罪を嫉んで其人を悪まますとか申すから左様致されては何

記代一丸徳俊

様じや殊に其方の父雅勝を殺したも彼れの所爲と申しながら自ら手を下して殺害致した別けてない……夫に荷めにも一旦俊徳へも母と致し其方も母と崇めし者故眼前に於て自殺致させては何様じや……ノウ正儀(正)御意の如き寛大の御斗ひ如何にも適當に存じます(春)正儀殿へ同意致します幾重にも服の御配慮を仰ぎ奉ると云ふので遂ひに萩葉は自殺と定まり正儀より萩葉へ改ためて申し渡す萩葉は難有沮に暮れまして(萩)今更お面を拜すのも恥しう存じます春緒殿小式部殿免して下され死して雅勝殿へもお詫を致します……亦た御前様へ願ひ升は死する今際に一子成弱性來愚鈍な生れ故へ髪を下させ僧と爲し人々の供養の爲め呉れども願ひ上り……俊徳君へ永の年月無理難題を申しましたも今更恥かしう存じます……正儀殿御身の忠義は知らざるにはあられども迷ひの雲に隔てられ忠臣を失いんとせし妾の罪何卒死して下され

記代一丸徳俊

(通)委細の旨聞き届け得さす思ひ残さず成佛致せ(萩)ハイ其お言葉が未来へ出産南無阿彌陀佛々々々々々々と口に唱へて懐剣を逆手にとつて吾れと我が咽喉元深く突き立てました苦痛の体は此世からある地獄の阿責惡の報ひは忽ち其身を亡ぼします暫時致して息絶へましたから之れを棺に納さめまして裏手の山へ埋葬致されました斯くて高安殿は萩葉が生前の遺言にまかせ成弱丸を攝州四天王寺へ送くり寺僧と致させ生涯削髮黒衣化て送くらせました先づ是れにて悪人どもは大概片他きましたたが俊徳丸級照姫の結婚并に萩葉の情夫忠太の行末等が未だ残つて居りますから是から此件りを詳細く申上りお話變つて和泉國茅渚の館に於ては級照姫婚姻の儀につき大鳥隼人を使者と致して事番端調ひましたたが名に負ふ其頃の長者と申すと舊幕時分の恰ど諸侯の様でありますから吾々どもの婚姻とは違ひ中々準備が左様早くは参りせまん夫れに年

記代一丸徳俊

廻りが悪いの善いので申して此は吾々俱斗りでは御坐りません上流社會でも古しへは皆な左様の事を申して居りましたものと見へ延引致して愈々此年の十二月十三日に高安家へ入興の事に定まりました然るに萩葉の前情夫でありました相川忠太主人川繼が反逆以來自分の身を恐れて岩屋を馳走致し諸々へ潜伏して居りましたが遂ひに強盗の群へ這入り矢張持ッたが病で斬り取りを業と致して年月を送つて居る中根が馬鹿でない奴でありますから遂々賊徒の張本と相成り洞ヶ嶽の山中に接家を造り百余人の小賊を従がへまして數里の中へ綱を張り人を斬害し或ひは夜盗押込みを業と致して常に不義の富貴に身を厥して居りましたたが一日小賊の山猿の權次と云ふ奴忙ただしく(權)巨魁へ申上り(忠)何んダ權次(權)へイ小者が今日商人の風をして小松原まで参りますと百姓体の男が三人向うから遣て來ての道風評に此十三日に和泉大塚の息女級

記代一丸徳俊

照姫が何内の高安家へ婚嫁と云ふ事ですが、正頭何んも大層な事
 んじや有りやせんか、一層強盗をする位なら夥多さま遣りてへど
 思ッて、夫て御注進に参へりやし、(忠)左様カ夫りや何にしる大し
 た物ダ何んど云ツたッて、長者同士の婚嫁だから……先ア仕事に成
 りや骨折りを遣らア充分働らけヨ(權)へイ(忠)何日ダツテ(權)エ
 十三日でごさへヤス(忠)十三日ダツテ(權)へイ(忠)是れく野郎
 洪皆んな聞ひてろヨ……今山猿が注進に、大榎の美人が十三日に婚
 禮ダトヨ引去ッて来た者ノにア、褒美を遣らア……宜いカ(小賊共)
 へイ難有うへいと一同へ忠太は示して十三日を相待ッて居ります
 茅淳方では左様な事とは少しも存じませんから、愈々十三日の當日
 と相成りますと、姫にはお菊お幾を始め夥多の侍女附添ひ、髪飾り
 は云ふ迄でもなく、化粧充分に致して身には、綾羅錦繡を纏ひ、黒き乗
 物に打ち乗せ参あらし、前驅後驅の行列正して若黨付添先きを拂つ

記代一丸徳俊

て若侍二行に連なり、歩卒の吊灯萬燈の如く宛然白晝に異らず、此時
 相川忠太は小賊を従へ、同勢二百余人、級照姫を奪ひ、大膽にも自己が
 女房に成さんと致し、利つさへ其雑具并びに金銀を掠めんと致して
 自己は最と嚴重の扮装に熊の皮の胴服を着し、山刀を落し、羞に羞し
 其他名ある小賊は皆な夫々に致させ、各々是れ等にも山刀を差させ
 勢ひ込んで、人数を繰り出だし、掠々嶺峙一里塚に集まり、絶頂より右
 手を翳して見下すと、級照姫の乗物と覺しく、前後に附添ふ人々十丁
 余り、威儀を正して其前驅には對の肩篋長刀を賣り、身ぎする仕丁、乗
 物は黒く致して金銀を鑲め、其光輝燈火に映じまして、瞬き斗り、朱傘
 數十本を翳掛け、冊の侍女各々衣裝の綺羅を飾り、一様の被は、風はひ
 らめき宛然一行の斜半天に連なるかど、誤たる其外供奉の面々律
 々敷致して、大榎御夫婦を警衛致し、來たる形状は實に目覺しく見へ
 ます、相川忠太は小賊等に下知を致して、峠を下り、級照姫を奪んと

致しますから前驅を遣り過して乗物の横合より不意に二百余人擊つて出で乗物遣らじと犇めければ供奉の面々大ひに周障スハ狼籍者ござんなれど茅渟の長者の家臣にて名ある勇士の人々には大鳥隼人杉浦要横田重太夫松並貢福田仙右衛門其余の侍一同に薙立て薙立て斬つて廻るに賊徒等大に避易すれども斯ては巨魁の手前へ對して濟んどや思ひけん勢ひ込んで斬つて廻れど如何にせん小手癢癢足立しず身体自由に働き得ず向へば斬られ逃ぐれば深溝へ陥り遂々此處に於て殲死に致し級照姫を易容と河内の高安家へ入興と相成りました情亦た懸る巨賊を難なく殲死に致しましたのは何う云ふ譯けたと申しますと是れは和泉國嘉祥寺の稻荷に祀りました三足の白狐此れを寛平狐と申して齡三百歳を經し狐大塚家に於て常に之れを庭園に参り無事平穩を祈りました爲めか恙なく此危急を免がれたと申しますが古への事でござる升から三世には能く是れ等の事の判別は出来ません只看客の御推測に任すのみでございます

第三十一回

高安殿の嗣子俊徳君は大塚規詮殿の息女級照姫を娶り給ひてより御夫婦の御中睦しく階老の契り淺からず致して御父通俊殿への益々御孝心深く且つ級照姫も俊徳丸君に劣らず眞御高安殿へ孝道を盡し錦織正儀夫婦をも大切に致すので正儀秋篠の喜びの一方ならず然れば秋篠は級照姫の傳冊と相成り常に御傍を去らず付き添ひ参らせますから級照姫も秋篠を勞り思召して大切に致させます貴人方でも下々でも人情に替りました事は御座りません斯様に思ひ思はれますと中々苦情と云ふ事は出来ませんが兎角我意と云ふ悪い意が發りますので悶着の種が生じますが實に温和な事は宜いのでござる升和泉の大塚規詮殿の忠臣大鳥隼人の妻お幾は元よ

記代一丸德俊

り姫様付きでいあります。が、姫が高安家へ入興と相成ったので、自分
 は何様でも級照姫に侍女たい心がござい升が己に隼人と申す良人
 のある身でありますから、大棟御夫婦に之れを止められ、矢張茅澤の
 館に於て奥方付きと相成って忠勤を勵んで居ります。然れば母のお
 菊も大層御意に入り、老女の烈に加はり、奥方の御相談に預かれて
 居ります。人の出世も斯う疾く参ると實に結構でござい升が、左様
 甘くは参りませせん、併し人間は運不運によつて随分疾く出世を致
 す人もござい升が、余り澤山はございませせん、何んでも不實を致さず
 品行を正しく致して居れば生涯の中には宜い事が来ると申す事を
 或る人より三世は承はりました。が、何様も永い事は眞に心棒の出来
 ないもので、併し其心棒を仕遂げんければ宜く成らないと申し升
 から誰方も左様御心棒を願ひ、升、諸高安家に於ては其年も暮れ遠曆
 四年新玉の春を迎へ、一家一門皆な目出度萬歳を祝して居ります。中

記代一丸德俊

神泉苑落成に相成、童子舞興行、觀覽ならせらるゝの旨布達あるによ
 つて高安家に於ては、俊徳丸君の御父を始め、級照姫、今年十七歳花の
 顔せ芙蓉の眉、實に絶世の美人、本夫を氣遣ひまして、種々秋篠其他事
 に馴れました。侍女に命じて、参内の準備を致させます。此處は俊徳丸
 錦織大藏正儀に萬事委ね、夫より愈々執行の當日に至り、美少年
 年の處へ一際立派な衣服を着し、佩刀を致して、侍冊正儀其他從者廿
 四人を従へまして、神泉苑へ参殿致した事、ござい升から、諸國より
 集り來たりし、少年の中、俊徳丸に優るものない、と申す程で、實に名
 譽な事であり、亦た此神泉苑と申す、八方八丁に致して、周の文王
 の盤園に准へて築れました。廣大の園であります。天王乾臨閣に登ら
 れ給ひ、童子舞、觀覽あらせらるゝに、諸皇族公卿百僚、烈を正し、位階に
 従がつて、何公す、天皇時に龍顏麗しく、其中、伶人等は思ひく、に色を
 飾りし、花裝束、善盡し、美盡致して、學器を奏する、音楽の調子、堂上、堂下

記代一丸德俊

に鳴り響き、清寥として恰も仙境の觀樂も斯くやと斗りに思はれま
 す諸家の少年入り替り立ち替り相値めます中、愈々高安の嗣子俊徳
 丸の番に當ります。此時俊徳十六歳、色白く眼秀で愛溢る、斗りの美
 少年花の袂は春風に翻へり、漸りゆかしき能衣装、見佛聞法樂の秘曲
 を管頭一起、新出る笛の音に連れて舞うさまの殊勝さは是れ中々言
 語に盡し得ません。暫時して舞い納めますと、天皇龍顏殊に麗しくせ
 られ、勅語あつて俊徳丸を玉坐近く召され、玉盃を賜はり、其賞として
 五位に任ぜられました。是れ孝心の徳に致して其より昇殿を聽され
 忠勤を盡せとの勅意を忝けなふ致されました。は實に高安家の面目
 俊徳丸の勳功と申べきでも御坐いませう。然れば是れより朝廷へ召
 され、勤王の志しを厚う致して美名を千載の今日にまで傳へられま
 す。實に其身に取りての名譽でおさる升御退屈様

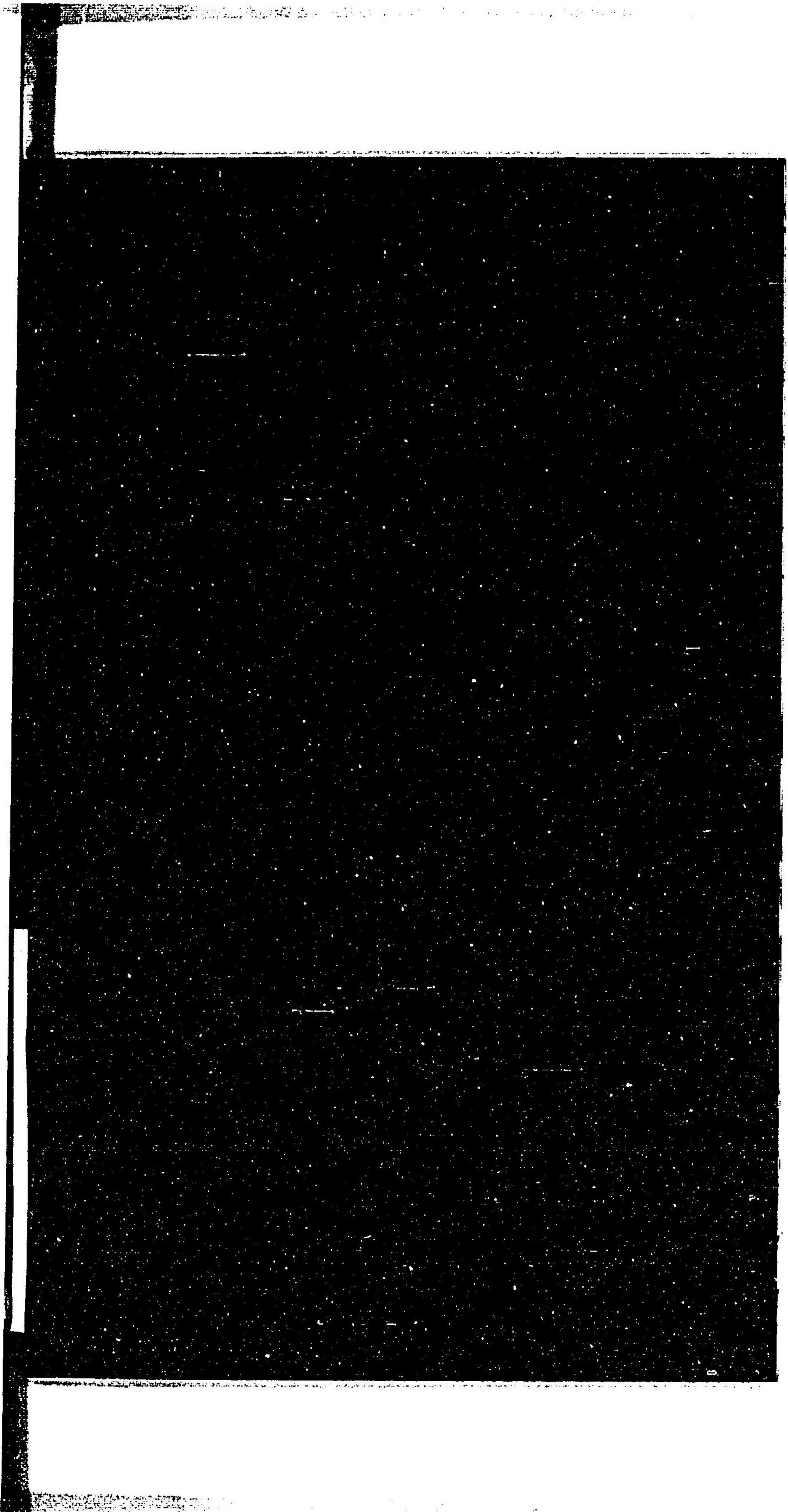
附言に申上、升近頃此速記學と申ものが流行に相成ましたので彼

記代一丸德俊

處でも此處でも此速記を致させますが、是れは文章と違ひ、御覽遊
 ばすには至極お譯り易うござる升……書肆三林堂主人は三世と
 一日四方山の談話に亘りました序……主人の申しますには、何に
 か速記法で宜さうあものを一版印刷て見たいが、何にか善い種
 はないかとの話から致して、此俊徳丸の説に亘りました近頃は、兎
 角文學の世界とは申しながら、未だ中々學術の進歩は容易では御
 座いません。表斗り進歩致して居りまして、其業に長けんければ
 眞の進歩と云ふ譯けには相成りません。然れば生地、自稱天狗で文
 章を賣る先生よりは返つて、此速記方の方が余ッ程宜しうござる
 升。三世も是れが初めて、おさいますから、何んな事を看客に申上
 て宜いか殆ど相分りませんが、三林堂主人の申しますには、人が
 聴ひて面白いのが一番だから、先ア遣て見ろとの勧めを便りと致
 してヤット大尾までこぢつけました。が、何に致しても深く取調べ

ます間が御座いませんで、充分看客の御意に入るか入らぬかわ
 相わかりませんが従来祭文讀みが唄ひますやうな物とはチト事
 が變つて居ります故人振鷲亭と申す作者が著りました俊徳麻呂
 謠曲演義と申す稗史がおさいます小生参考の爲め一閱致しまし
 たが古人の作と云ひ當世から見ると余り虚々敷い事が書てあつ
 て夫は讀み難うござる升から小生は偶意をもつて別に趣向を相
 立てまして御機嫌を伺ひ升々元より歴然と致した正史を以つ
 て編りましたもので御座いませんで只俊徳丸合法の古跡を仮り
 て忠信孝貞の形狀を口にかかせて演べました丈けのものでござ
 いますから振鷲亭の著作と小生の口演とを見並べを願ひ升焉

俊徳丸一代記了



特46

933

俊徳丸一代記

国立国会図書館

097204-000-0

特46-933

俊徳丸一代記

桜井 三世/口演

[M23序]

DBS-1017

